練馬･文化の会 会だより

共同代表：有原誠治　大内要三　小岩昌子　小沼稜子　田場洋和　吉田已蔵
事務局：森田彦一　TEL：03-3951-4276 FAX：03-3951-0616
（会費などの郵便振替：00150-7-130265　練馬･文化の会）　ホームページ　http://www.nerimabunka.com/

「沖縄映画祭」特集

戦争、基地、伝統芸能など丸ごと「沖縄」を知ろう！
9月24日～10月2日―武蔵大・ギャラリー古藤で「沖縄映画祭」
全12作品を上映、作品の監督など10名の多彩なトークゲスト
（9月号ニュースでチラシ同封いたします）

「えこだ沖縄映画祭」が9月24日（土）武蔵大学、同25日～10月2日(日)ギャラリー古藤で行われます。語やびら沖縄・もあい練馬、江古田映画祭、練馬・文化の会の３者共催によるものです。9月24日（土）は武蔵大で『ドキュメンタリスト・森口豁』トークショーで、25日から10月2日まではギャラリー古藤で10作品が上映されます。同映画祭のチラシは9月号の「会だより」に同封いたしますが、今号では、森口さんのプロフィールと古藤で上映する10作品の内容を手短に（古い制作順に）紹介します。

◇9月24日（土）午後2時～5時　武蔵大学1102視聴覚教室
沖縄を撮り続けるヤマト出身のドキュメンタリスト―森口豁トークショー

森口豁さんは1937年東京生まれ。1959年沖縄に渡り、琉球新報記者を経て日本テレビ「沖縄特派員」などで沖縄と関わり・報じ続けて50数年。「沖縄を語る一人の会」主宰。沖縄をテーマにしたテレビドキュメンタリーを28本制作。「ひめゆり戦史　いま問う国家と教育」「草分け沖縄鳩間島哀史」などで日本ジャーナリスト会議奨励賞など受賞。おもな著作に「子乞い　沖縄孤島の歳月」「米軍政下の沖縄　アメリカ世（ゆー）の記憶」等多数。今回のトークショーでは制作2作品のビデオを参考上映して「沖縄への思い」を語って頂く。

◇25日～10月2日までギャラリー古藤で上映される10作品短評（古い順）

○「イザイホウ」（ドキュメンタリー、1966年制作、ゲストトーク：野村岳也監督、赤坂憲夫）

沖縄県南城市の久高島は、昔から神の島として知られ、年間三十に及ぶ神事が島の暮らしに組み込まれており、今でも島人によって厳粛に受け継がれている。 この久高島最大の神事が、十二年に一回午年に行われる「イザイホウ」である。30歳から41歳の、島で生まれ、島に生きる女が神になる神事で、四日間の本祭を中心に、一ヵ月余の時をかけて行われる。これは、1966年の「イザイホウ」の記録作品である。「イザイホウ」は1978年を最後に消滅した。「イザイホウ」　は、ドラマチックな構成を持ち、歌や踊りの原点ともいうべき内容をもつ。

○「沖縄列島」（ドキュメンタリー、1969年制作、東陽一監督）

爆音の中の沖縄。頭上をベトナムと結ぶ軍用機が去来し、本土からの観光客を乗せて走る観光バスの向こうにはB52の黒い尾翼が屹立している。

観光案内をしていたガイド嬢が突然、「沖縄を返せ」を歌い始めた。観光客の間をぬって観光パンフレットを売る老婆。

1992年の「橋のない川」で観客動員の記録をつくった東陽一監督の長編記録映画第１作。当時様々な論議を呼んだ作品。

○「沖縄」（劇映画、１９７０年制作、武田敦監督、ゲストトーク：佐々木愛）

日本への復帰前の作品。パスポートが必要だった沖縄ではなく、本土の奄美などでのロケで制作された。映画解説パンフは「1968年11月沖縄初の主席選挙で、民主統一候補の屋良朝苗氏が当選。それは戦後沖縄の歴史を変える素晴らしいできごとでした」と同映画制作の意義を解説する。地井武男初主演作品、佐々木愛、中村翫右衛門らが脇を固める。第1部「一坪たりともわたすまい」では土地取り上げと闘う農民、若者、第2部「怒りの島」では、軍労働者、教職員を主軸にストライキに立ち上がった島民を描く。

○「オキナワの軌跡～３３万島民の悲劇」（ドキュメンタリー、１９９３年制作、石原昌家、高宮城繁監督）

1945年4月1日、米国第10軍は1400隻もの大艦隊で、沖縄本島に上陸した。10万の日本軍沖縄守備兵力に対し、米軍は上陸補給合わせて54万人という大軍団。米軍はその日のうちに読谷飛行場と嘉手納飛行場を占拠。4月3日には本島を南北に分断して日本軍を北へ南へと追い詰める。

激しい戦闘の中で住民の集団自決という悲劇も起こった。そして、多くの難民となった人々の、収容所を転々とする戦後が始まる。戦闘に巻き込まれた民間人の犠牲は10万人とも15万人ともいう。

当時9歳で軍国少年だった高宮城繁さんと当時19歳で義勇隊だった渡慶次ミツ子さんの壮絶な話は、映像の迫力を上回る。

○「教えられなかった戦争―沖縄編　阿波根昌鴻・伊江島のたたかい」（ドキュメンタリー、１９９８年制作、高岩仁監督、ゲストトーク：岡本厚・元「世界」編集長）

1903年沖縄本島本部に生まれた平和運動家・阿波根昌鴻さんを語り部として、沖縄の近・現代史を描いた記録映画。近代から、江戸幕府、日本政府、太平洋戦争後はアメリカに搾取されてきた沖縄の歴史が語られる。内村鑑三に師事した阿波根さんは「非暴力で戦い尽くし、『平和の武器は学習』と言い続けた」（謝花悦子）という。映画は阿波根さんのほかに多くの人の証言や当時の写真などで沖縄の姿を浮き彫りにする。

土地使用の期限切れを迎えた「象のオリ」へ向かう地主や支援者たち（1996年4月1日）

○「ふじ学徒隊」（ドキュメンタリー、２０１２年制作、野村岳也監督）

戦争のさなか暗い壕の中でうごめく傷病兵の看護に当たった女子学生「わたしたち」が、さまざまなできごとにぶつかりながら「死の教育」をくぐりぬけて、人間らしく生きていこうとする、歩みの記録である。映画は、積徳高女学徒看護隊の野戦病院実録『血と涙の記録』を基本にして組み立てられた。豊見城城址の壕に隠れていたのは山部隊第２野戦病院。ふじ学徒たちは、そこで”戦場“ を体験した。野戦病院では学徒25人が看護に当たり、うち1人は戦死したが24人には6月26日（1945年）に解散命令が出た。そのとき隊長が「死んではいけない。必ず生きて親許へ帰れ」と言い残して自らは自決した。短いながら「沖縄戦」を告発する内容がわかりやすく盛り込まれている。

○「誰も知らない基地のこと」（ドキュメンタリー、２０１２年制作、イタリア監督、ゲストトーク：元山仁士郎：シールズ琉球）

世界各国で起こっている米軍基地問題の真実を追究したドキュメンタリー。2007年にイタリアで起こった米軍基地拡大への反対運動をきっかけに、イタリアで活躍するカメラマンのエンリコ・バレンティーと政治研究者のトーマス・ファツィが監督となって、ビチェンツァ（イタリア）、ディエゴ・ガルシア（インド洋）、普天間（沖縄）など各国を取材。基地の騒音や兵士が起こす事故などに悩まされる付近の住民や、専門家へのインタビューなどを通して、米軍基地問題の実態を明らかにしていく。

○「沖縄　うりずんの雨」（ドキュメンタリー、２０１５年制作、ジャン・ユンカーマン監督、ゲストトーク；ジャン・ユンカーマン）

1945年4月1日から6月23日まで12週間に及んだ沖縄地上戦では4人に1人の住民が殺された。当時同じ戦場で向き合った元米兵、元日本兵、沖縄住民に取材を重ね、米軍の記録映像を交えて沖縄戦の実情に迫る。

また戦後のアメリカ占領期から今日の辺野古への基地移設問題に繋がる、沖縄の人たちの深い失望と怒りの根を浮かび上がらせる。

「老人と海」「映画日本国憲法」をつくったユンカーマン監督は「米軍は沖縄を戦利品として扱い、沖縄の基地を拠点に朝鮮、ベトナム、中東で戦争を続けてきた」と糾弾する。

○「ザ・思いやり」（ドキュメンタリー、２０１５年制作、リラン・バクレー監督、ゲストトーク：リラン・バクレー）

日本人が自らの税金をアメリカ軍のために支払ったのは、３４年間で６兆円に上ると言われている。これはアメリカとの条約で義務付けられているものではない。かつて金丸信防衛大臣の言葉をもとに命名された「思いやり予算」と言われるゆえんだ。神奈川在住のバクレー監督が、米国にも取材し、米国人にもインタビューして、その矛盾を問い、沖縄国際大学の前泊博義教授の解説やお笑いの松本ヒロを登場させてコミカルに問題点を明らかにする。米軍基地と日本の予算の矛盾点を明るいタッチで描いている。

○「人魚に会える日」（劇映画、２０１５年制作、仲村颯悟監督、ゲストトーク：仲宗根宗吾助監督と仲間たち）

沖縄の高校生ユメ（儀間果南）は、生まれた頃から近所に立ち並ぶ米軍基地を当たり前のように感じていた。基地の建設で県民の意見が賛成と反対に二分されていることを知っても、大きな問題とは思わなかった。しかし同級生の結介が、美しい海が基地建設によって奪われることをひどく気に病み、突然姿を消してしまう。ユメは結介を探すために、基地建設の計画が進む村を訪れる。そこは、古くから海や山など、自然界の神の許しを乞いながら生活する村だった。基地は造るべきなのか、基地にまつわる争いは終わるときがくるのか……。13歳で「やぎの冒険」を監督した仲村颯悟の長編2作目。監督をはじめ、主要スタッフはすべて沖縄出身の大学生が務めた。人魚伝説のモデルとなった生き物ジュゴンをテーマに、基地問題に揺れる沖縄の“今”を女子高生の視点で切り取る。

ーーーー仲村颯悟(なかむらりゅうご) ーーー
1996年沖縄県生まれ。小学生の頃から映像制作を行う。長編デビュー作は13歳の時に監督した『やぎの冒険』(2010年)。

現在、慶應義塾大学に在学中。本作『人魚に会える日。』は、すでに14歳の頃に書き上げていたオリジナル脚本を元に、5年ぶりの長編2作目となる。

10区補選に向けて「ＴｅＮ１６」が始動

参議院選挙では、野党統一候補が一人区で11人が議席を獲得しました。都知事選では、残念な結果となりましたが、野党の協力が前進しました。

練馬でも「平和なくして文化なし、文化なくして平和なし」の信念のもとに、それぞれが、「勝手連」に参加し、東京都の改革を目指して頑張ってきました。

こうした中で、練馬区の一部と豊島区が範囲の衆議院10区の補欠選挙が10月23日投票で行われることとなりました。

「市民連合」が発表した①安全保障関連法の廃止　②立憲主義の回復　③個人の尊厳を擁護する政治を実現するための野党共闘の要求　に共感し、野党が共闘して東京10区で統一候補を立て、与党候補に勝利し、安倍政権を退陣に追い込むために、練馬区と豊島区の市民が集まって、このほど、「ＴｅＮ１６」（ＴｅＮネットワーク２０１６）を作りました。

豊島、練馬地区の在勤、在住の学者・文化人もこれに呼応して、声明文を作りました。立教大学の砂川浩慶、西谷修、稲葉剛の各先生、武蔵大学の永田浩三先生、学習院大学の佐藤学先生、埼玉大学の三輪隆先生、それに大山勇一、菊池紘、伊藤朝日太郎各弁護士が現在の段階で賛同してもらっています。

豊島区、練馬区の各野党もいま賛同の方向で、進んでおります。

9月4日（日）午後2時から雑司ヶ谷地域文化創造館で、「ＴｅＮ１６　わたしたちの声を届ける区民会議」を正式に発足いたします。

（文責・森田彦一）

会費納入のお願い

文化の会会費を未納の方に振込用紙を同封いたしましたので納入方よろしくお願いいたします。

なお、本状に行き違い等がございましたらご容赦ください

振込先　郵貯銀行　00150-7-130265
　　練馬文化の会
会費に関する問合せ先　轡田英夫　携帯　090-9809-8591
　クツワダ　Eメール　rsc03465@yahoo.co.jp